

苗瑤語再建の問題

～『苗瑤語古音構擬』の書評をかねて

田 口 善 久

0 はじめに

王輔世・毛宗武両教授の『苗瑤語古音構擬』（以下『古音構擬』）は、苗瑤語の祖語の声母と韻母を、現代語の豊富な例にもとづいて再建したもので、両教授の50年代からの苗瑤語学研究成果というべき著作であり、今日まで非公開であった50年代の中国国内の調査の記録を公にしたという意味で、この分野の研究者が参考とすべき資料を含んでいる。また、それと同時に従来の研究の問題点の多くも浮き彫りになっているという点でも興味深い。本稿の目的は、『苗瑤語古音構擬』を参照しつつ、苗瑤祖語再建の問題点をあげ、解決へ向けての方向を考えようとするところにある。

1 祖語再建の方法

1.1 『古音構擬』の問題

漢字表記によるものであれ、表音文字によるものであれ、歴史的資料のほとんどない（全くないわけではなく、20世紀初頭のヨーロッパ宣教師による記録や、漢人による漢字にによる苗瑤語の記録はある。だが、いずれも断片的なものである）状態では、現代の諸方言のデータにもとづき、比較言語学の方法によって祖語を再建していくほかに方法はない。

比較言語学の方法を用いる場合には、一般的に祖語からまず分かれた語支 (branch) ごとにそれぞれの祖語を再建して全体の祖語にさかのぼるのが常道であるが、方言の分類とこの比較方法の適用は、相互参照的なものであると考える。語彙の単純な比較などによる基礎的な分類の上に、比較方法によって判明するそれぞれの方言がたどった音韻史を証拠として更に正確な分類をしていくのである。祖語の再建は、それらの語支の再建形に基づいて行われるべきものである。したがって、苗瑤語の再建においては、すでに現在までに明らかにされている、苗語支、瑤語支などの再建が先行し、それらに基づいた再建が期待される。しかるに、『古音構擬』ではこの方法は用いられておらず、言語調査が行われた23地点の言語資料から直接祖語の形が導かれる。

次に、祖語の再建は、常にそれより後代の形を導くような考慮のもとで言語学的に最も合理的な形をうち立てるものでなければならない。このことは、再建という作業が音韻史の再構築という、祖語から後代の形までの変化の様子も明らかにするものであることを示している。『古音構擬』はこの点に対する配慮がまったくなされていないかのごとくである。現代語・方言の形から、祖語の形が直接導かれ、そこでは変化の様態や、音法則の提示などは行われていない。

さらに、このことと関係するが、『古音構擬』では再建形の建て方にも問題がある。そこで、と

(6)

られている方法は、見る限りにおいては最小公倍数を求めるようなものである（王氏の助言にもある）。再建の作業の結果、そのような形が導かれることはあるものの、筆者はそれが再建形を立てる方法であるとは認めない。これは『古音構擬』という著作の性格に関係する。このことはまた以下で述べる。

もう一つ重要な問題として、再建される祖語の体系の問題がある。祖語は再建という理論的手続きの結果仮構された言語であるが、一つの言語としてそのplausibilityについての評価を受けるべきである。それについてはいくつかの見解があるが、類型論による世界の言語の普遍性と個別性についての研究をもとにして評価するのが有力な方法であるといえるだろう。この点についても、『古音構擬』はかなり無関心を装っているように見える。このこともまた以下で詳しく述べる。

また、再建される最小の単位はやはり音韻的なものであるはずであり、その基礎として再建のデータを提供する現代語・方言の音韻体系の分析が不可欠であるのはいうまでもない。これは、むしろ不便という指摘になるかもしれないが、『古音構擬』がこれを声調についてしか提示していないのは残念である。

1.2 『古音構擬』の性格

じつは、『古音構擬』にはその基盤となった王補世氏の著作『苗語古音構擬』があり、それを読んでもみると、著作の意図するところがわかる。王氏のこの著作にはさらにその前身があつて、いくつかの論文があるが、その目指すところは苗語の『広韻』をつくる、ということであつた。『広韻』というのは、周知のとおり中古中国語の漢字音を声調や韻ごとに分類したもので、そこでは同音かどうか、同韻かどうかという細かい配慮のもとに漢字がグループ分けされ、そのグループの代表字がまたグループの名前になっている。王氏のこの意図するところから考えると、苗瑤語の各言語・方言資料から、対応する声母と韻母をグループにまとめ、それに名前をつける、という作業が『古音構擬』の仕事ではないかと想像がつく。また、そう考えるとこの著作の問題点としてあげた諸点も何ら不思議はないものとなる。つまり、この著作の意図するところは、いわゆる言語学でいう再建(reconstruction)ではなく、対応語のグループ分けとその名前付けにある。再建形が、一見奇妙な/*mn/(9.2)や/*nm/(213.2)などの形をしているのも、その祖語の声母の対応で/m/と/n/が反映としてみられ、それぞれ/m/と/n/の反映形しかないグループと区別があると考えているからである。そして、それらのグループの名前として、祖語の音節構造を考慮したとは思われない再建形がとられているわけである。また、音韻史の提示がないのも、同様の理由からと考えられる。

とすれば、やはり言語学的再建の立場から、これらの多くの資料を用いて各語支の再建から始め、祖語から現代語・方言の形に到るまでの音韻史を再構築する仕事になされるべきであろう。本稿では、これらの問題に詳細に立ち入ることはできないが、以下でそれに関するいくつかの問題点を見ていくことにしたい。

2 再建上の問題

2.1 再建の方向

まず、はじめに大きな問題から取り上げる。苗瑤語は大きく分けて苗語系と瑤語系の2つに分けることができる（さらに方言数の少ない語支をたてる可能性はあるがとりあえずここでは触れない）。苗語系は語頭子音とりわけ鼻冠音の保存がよく、また調音点も多い。一方韻母の数は少なく、ほとんど開音節化している言語もある。瑤語系は韻母の数が多く、鼻音のほかに-p-t-kの閉鎖音で終わる音節をもつ言語が見られる。このような状況においては、祖語を声母は苗語を、韻母は瑤語にもとづいて再構するという方向が思い付かれるのは当然といえる。保存されている部分をつなぎあわせて祖形を再建するというのは、やはり再建の重要な手続きであるからである。

『古音構擬』でもこの方向は明確に見て取れる。しかし、この点についてもよく考えてみる必要がある。このやり方が正当化されるのは、他に見られない特徴が祖語の特徴を「保存」したものであるという前提があるからである。苗語の声母のいくつかの特徴、例えば鼻冠音をもつという点については、それが祖語に遡れることは瑤語の特徴からも支持されるので、それを保存された特徴であると見なすことができる。一方、瑤語の複雑な韻母の体系については同じことは苗語の中では確認できない。苗語系の韻母はひどく単純化されており、瑤語と対比する限り、そこでは大規模な合流が起こったと考えざるをえない。この大きな変動現象の理由は不明である。苗語が接触してきた彝語系言語からの影響というのが有力な考え方であるが、彝語系言語と接触したと考えにくい大陸沿岸部の苗語系言語である畚語にも同様の特徴が見られることもあり、明確な解答はえられていない。一方、瑤語の複雑な韻母の体系はタイ系の言語とよく似ており、タイ系言語からの影響と考えられなくもない。これは、一般的に歴史言語学における規則的変化の定式化の仕方と密接な関係がある。歴史言語学では複雑なものから単純なものへの変化は、たとえそれが他言語からの影響であるとしても、消失や合流として扱われるが、その反対に複雑なものを新しい変化としてたてることには条件の設定など難しい問題がある。苗瑤語の内部だけに視点をおいた研究では、瑤語の特徴を古いものであると認めて、苗語の側で合理的な変化則がえられるかどうか見ることはできないようであるが、より広い視点をもった研究の際には多めに留意すべき点であると思われる。

2.2 声母と韻母の体系

以上の事柄は、祖語の体系と深い関係がある。苗語の声母体系と瑤語の韻母の体系をあわせもった複雑な音韻体系の言語を祖語として仮構するとして、それは現代語・方言ととりわけ音節数の点で、あまりにも差異がありすぎはしないだろうか。もちろん、現代語は祖語と比べて声調の数は多いし、複音節化の単語の増加も仮定できる。しかし、川黔滇方言の羅泊河次方言のように声調が分岐してない（ように見える）言語もあり、そこでも苗語一般に見られる韻母の単純化はおこっている。祖語の音節構造の問題は、再建上大きな問題の一つである。

では、この点について『古音構擬』を見てみよう。それによれば、声母は263個、韻母210個の体系が仮構されている（ここでいう韻母の数は、音節末に破裂音のたつ、いわゆる促音節を別に

(8)

数えたものである)。巻末の祖語の声母表を見ていただければわかるが、これも例が見つからないが体系上あるべきものを含まない数字である。もし、表中空欄になっているところを破裂音と鼻音だけたてても声母の数はゆうに400を越えるだろう。これと現代語と比べてみると、声母のやや複雑な苗語湘西方言で声母67個、韻母16個であり（『苗語簡志』による）、韻母のやや複雑な瑤語勉方言で声母79個、韻母61個である（『瑤語簡志』による）。これが音節数の差となるときわめて大きくなる（ただし、声母と韻母の結合法則は明確ではないので、単純に掛け算をするわけにはいかないが）。もちろん、このような数字をただ並べても意味のある結論は出てこない。ただ、漢語の中古音の体系と比べてみるのは少しは意味があるかもしれない。現代語の北京語が声母19個、韻母が34個、一方広東語は声母20個、韻母51個として（『中国文化叢書：言語』による）、中古音は声母が伝統的な36字母として、韻母が大体150個程度といわれているから、これと比べても『古音構擬』の体系が膨大なものであることが分かる。

ここでの論点は言語としてのplausibilityということである。苗瑤語の祖語が単音節一形態素の主とする声調言語であると仮定すれば、やはり中古漢語や東アジアの声調言語と同じようなタイプの言語であると考えられる。それを考えると、400以上の声母体系などはやはり単純に考えても疑問がある。もちろん、苗瑤語という言語が他の東アジアの言語と全く同様の構造をしているはずだなどという主張をしているわけではない。すでに認められているように、苗瑤語は、破裂音、鼻音、摩擦音、流音など子音のすべてに無声無気・無声有気・有声の3項対立をたてられ、また3種類の閉鎖音にはそれぞれprenasalizedの対が存在する。これは苗瑤語に独特のものといえる。このために、祖語の声母体系はいずれにせよかなり複雑になるはずであり、それは他の東アジアの言語に勝るものであるはずである。問題は結局、plausibleで整合性の高い祖語体系の再建ができるかどうかである。以下では特に声母について具体的に『古音構擬』の体系を見ていこう。

2.3 祖語の声母体系

『古音構擬』によれば、祖語の声母は調音点が調音様態を区別しなければ以下の10個所（ただし、体系的な分析がされていないので不明な点もある）がある。詳しくは巻末の声母表を見ていただくとして、ここでは例をあげるにとどめる。

bilabial : p, ph, b, mp, ……
dental : tθ, dð, ndð, ……
alveolar : ts, tsh, dz, nts, ……
retroflex : t̠, t̠h, d̠, n̠t, ……
palato-alveolar : tʃ, tʃh, dʒ, n̠tʃ, ……
alveo-palatal : t̺, t̺h, d̺, n̠t̺, ……
palatal : c, ch, ʃ, n̠c, ……
velar : k, kh, g, ŋk, ……
uvular : q, qh, G, n̠q, ……
laryngeal : ʔ, h, h̠, ……

人類言語でこれほど細かな調音点の使い分けをしている言語はおそらくはないだろうと思われる。特に、/tθ, ts, tʂ, tʃ, tɕ/の如き豊かな破裂音の種類が一つの言語に見られることはまずない。また、鼻音、摩擦音の分布が偏っていることが目立つ。破裂音の調音点は(laryngealを除けば)7つであるが、対応する鼻音は5つしかない。摩擦音も無声有気の系列だけが多く見られあるべき無声無気、有声の系列は少ない。もっとも、単に数が多いということを批判しているのではない。これらの調音点における対応を見てみると、体系的なバランスの悪いところを修正できる場所が見つかる。例を挙げよう。

声母番号349以降のtʃ系列の声母を見ると、この破裂音は対応する破裂音も鼻音もなく、体系的に納まりの悪いものとなっている。また、苗語の対応語例がほとんどない。一方、397以降のtɕ系列の声母を見るとこれらの音の対応はいくつかの借用語と見られる例を除けばほとんど同じである。したがって、これらを同一の声母と考えれば、体系的にきれいになる。さらに、469以降のc系列の破裂音は対応する破裂音も鼻音もなく、これも座りが悪い。苗語の対応は基本的にvelarであり、安定している。そこで、541以降のk系列のvelarの子音を見てみると、これと先の系列の違いは瑤語の藻敏方言の対応であることが分かる。これは私見では母音の結合の違いにより説明できる。したがって、この2つも一つの声母を再建すればすむと思われる。

また、それぞれの調音点には一般に単純な子音のほかに、口蓋化音と円唇化音、その両方の特徴を持った口蓋化円唇化音の3種類がたてられている。これは、伝統的漢語音韻学でいう介音に相当する。さらに、/l, ʃ, s, ɕ, ts, tʂ/という子音が、破裂音(鼻音にも1つだけ)声母の第2要素として現れるのだが、この分布が非常に奇妙なものである。これらクラスターの調音点による分布は次のようなものである。

	唇	齒	そり舌	齒茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂
/l/	+	-	-	-	+	+	+
/ʃ/	+	-	+	-	-	-	+
/s/	+	-	-	-	-	-	-
/ɕ/	+	-	-	-	-	-	-
/ts/	+	-	-	-	-	-	-
/tʂ/	+	-	-	-	-	-	-

すべて唇音について結合が見られるがその他はほとんど現れない。まず、/tʂ/についてであるが、これは無声の第1子音と結合するときには/tʂ/であるが、有声音と結合するときには/dɕ/となっている。この音素は/r/とすべきであろう(音の性質は変わるが、再建上も都合がよい)。*/s//ɕ//ts/*の現れ方はもっと奇妙で/s/は/ph/と/ɕ/は/v/としか結合例がない。これらはクラスターではなく、単子音の変化による分岐を考えるべきものである。最後に/ʃ/であるが、口蓋垂音における/ql/と/qʃ/の対立は不明確で、確証はない。また、/tʃ/はないのに/tʃ/はある(しかも無声化した/ʃ/)というのも体系的に不均衡である。現代語の状況を見ると、dental-alveolarの領域では側音のクラスターがないのがこの言語の特徴であるように思われる。この音はむしろ/tʃ/と

(10)

した方がよい。

以上のような点は、1.2でふれた『古音構擬』の特徴、すなわち対応の分類と名前付けという作業から生み出された結果であるといえる。言語学的立場からは、体系全体の構成と音変化の自然さを考慮しつつ再建作業をしなければならないが、そのためにはもう一度対応の事実の確認から始めねばならないと思われる。

参考文献

- 『苗瑤語古音構擬』(1995) 王輔世、毛宗武、中国社会科学出版社
『苗語古音構擬』(1994) 王輔世 東京外国語アジア・アフリカ言語文化研究所
『苗語簡志』(1985) 王輔世、民族出版社
『瑤語管志』(1982) 毛宗武、蒙朝吉、鄭宗澤、民族出版社
『中国文化叢書：1 言語』(1967) 牛島徳次、香坂順一、籐堂明保、大修館書店

付録

『苗瑤語古音構擬』の声母表を以下にあげる。『苗瑤語古音構擬』ではこのような表がなく、声母体系がわかりにくいためである。横の欄に音の種類を縦の欄に調音点をならべた。数字は『苗瑤語古音構擬』におけるその列の最初の声母の声母番号である。なお、[]は声母表にはあるが本文中にはない声母を示す。これは乱丁によるものか、誤記によるものなのか不明である。また、alveo-palatalの破裂音は \hat{t} 、 \hat{d} などで記した。

付 録

(12)

1	plain			prenasalized		
13	p	ph	b	mp	mph	mb
25	pw	phw	bw	mpw	mphw	mbw
37	pj		bj	mpj		mbj
49	pwj	phwj	bwj	mpwj		mbwj
59	tsh			mpts	mptsh	mbdz
61	pwts	phs	bwdz	mpwts		
73	pts	phtsh		mptş		mbdz
85	pl	phl	bl			mbl (mbwl, mblw)
97	pl		bl			
109	tθ		dð			ndð
121	tθw		dðw			
134		tθhj		ntθhj		
146		tθhwj				
157	ts	tsh	dz	nts	ntsh	ndz [ʔns nş ns]
169	tsw		dzw			ndzw
181	tsj		dzj	ntsj	ntshj	
195			dzwj			ndzwj
205	t	th	d	nt	nth	nd
217	tw			ntw		ndw
232				ntj		
243			dwj	ntwj		
253	t	th	d	nt	nth	nd
265	tw					
277	tl		dl	ntl		ndl
300						
311						
313	tş	tşh	dz	ntş	ntşh	ndz
326	tşhw					
339			dzj	ntşj	ntşhj	
349	tʃ	tʃh	dʒ	ntʃ	ndʒ	
361	tʃw		dʒw	ntʃw		
374		tʃhj		ntʃhj		ndʒj
388				ntʃwj		
397	t		d	nt		nd
411			d̄w	nt̄		nd̄
424				nt̄j		
433	tɕ	tɕh	dz		ntɕ	ntɕh
446		tɕhw	dzw			
457	tɕj					
469		ɲj				
481	cw					
498						
507		ɲwj	ɲcwj	ɲɲcwj		
517	cl		ɲcl	ɲɲl		
532			ɲclj			
541	k	kh	g	ŋk	ŋkh	ŋg
553	kw	khw				ŋgw
568				ŋkj		
577	kl	khl	gl	ŋkl	ŋkhl	ŋgl
589	klw					
601	klj		glj	ŋklj		ŋglj
613	q	qh	g	ŋq	ŋqh	ŋg
625	qw		gw			ŋgw
637	qwj	qhwj	gwj	ŋqwj		
649	ql		gl			
661	qlw		glw	ŋqlw		
673	qlj		glj			
685	qlwj		glwj			
697	ql		gl			
709	?					
731						

nasal			sonorant		
ʔm	m̥	m	ʔv	v̥	v
ʔmw	m̥w	mw			vj
	m̥j	mj			
	m̥wj	mwjn			
					vz
		mwl			

					θ
					θj
					θwj
					s
					sw
					sj
					swj
ʔn	n̥	n	ʔl	l̥	l
ʔnj	n̥w	nw			lw
	n̥j	nj		ʔlj	lj

ʔn	n̥				
			ʔl	l	l
				lj	lw
				ʔ	lj
				sj	
				ʃ	

ʔñ	ñ̥	ñ̥w			
		ñ̥w			
ñdz			ʔz	ɸ	z
			ʔzw		zw

nj

	ɸ	x			
	ɸw				

			h	ɦ	
			hj		